資料４
科学技術・学術審議会　学術分科会
人文学・社会科学特別委員会（第11回）
令和４年５月27日

人文学･社会科学の指標における
これまでの検討状況

学術分科会（令和4年4月12日）における主な意見

◆　書籍は業績に加える必要がある。書籍の業績を評価する際には、それぞれの分野のメジャーなジャーナルに、どれくらいその本が引用されたのかをカウントしてはどうか。それは、各分野ごとのトップパブリッシャーといえるようなもののランクを作るということで可能ではないか。

◆　論文についても、研究の競争的な環境を醸成し、適切な評価を行っていくべきではないか。

◆　人文学・社会科学の力を伸ばすという観点だけでなく、人文学・社会科学が自然科学と共同して「総合知」に取り組み、それを評価し、その実績を社会に発信する仕組みも同時に考える必要があるのではないか。

◆　分野において適切な評価がされるということは、人文学・社会科学に限ったことではなく、自然科学の分野でもコンテクストによる影響が非常に大きい。国際的な評価といった場合に、日本のデータの方が大規模なのに国際ジャーナルに受け取ってもらえないこともあったりするので、「総合知」といった観点も踏まえ、自然科学も含めて何が適切な評価かという議論を深める必要がある。

◆　母国語での発表と英語での発表をどのようにバランスし、その中で、人文学・社会科学をどう振興すればよいか。人文学・社会科学の持つ地域性や多様性に配慮していくことが国際的な課題という捉え方もあるのではないか。

これまでの人文学・社会学特別委員会における主な意見

◆　書籍の引用数を見ることは意義があるが、日本ではデータがどれほど取れるのかが課題。特に日本の論文、書籍から書籍への引用についてはデータをとれないのではないか。引用が取れるような参考文献、リファレンスのリストの整備や論文の重複を整理するなど、データベースを整備していくしかないのではないか。

◆　（優れた研究には競争的資金等の外部資金が来るという前提について）日本の場合、運営費交付金配分の共通指標の中に外部資金が入っている。ただ、研究の良し悪しというよりは、大学の経営に関する努力を見る指標とするなど、研究成果の指標ではない形で使っているケースが多々見られる。一方で、研究成果に対する外から認められているという意味で外部資金を使うという例もあるが、人文学・社会科学でそのように使えるかは疑問。

◆　（社会的インパクト評価を入れた場合の方法について）社会的インパクトについては、測定や評価の方法を各国で議論しているところ。現状、イギリスのREFと呼ばれている評価（代表的なケーススタディーを評価）が良いと言われている。今後、より精緻化、標準化の方向を期待。

◆　インパクト評価においては、政策提言とか、実際的な社会のルールづくり等にどのように人文学・社会科学が貢献しているのかということを見ることは重要ではないか。

◆　企業の研究者で人文科学の研究者が極めて少ない。人文学・社会科学の分野において産業界に貢献するように本来はシフトしていくべきであって、そうではないところに日本の産業の弱みがあるのかもしれない。

これまでの人文学・社会学特別委員会における主な意見

◆　現時点でどのようなデータがそもそも把握可能で、そこから何が分かるのか、もしくは分からないのかということを整理することが必要。それからあるべき姿に向かってどのようにデータを整備していくのかという議論になると考えている。

◆　今後、分野の発展のためにはどのような方向に持っていきたいか、そのためにはどういう指標を設定したらいいか、という論点も重要ではないか。

◆　１つの指標を設定して目安とするのではなく、少し違った基準での指標を組み合わせてみるなどすると、人文学・社会科学における多様な側面を検討するのに有益ではないか。

◆　日本の出版のレベルについて、過去に海外の出版社に関してトップ１９パブリッシャーという分析を行ったことがあるが、日本では外部からとってこられるデータでは質の評価は現状では難しいと考えている。仮に質を見るのであれば、各機関から良い書籍というのを推薦してもらいレビューを行うということが必要。

◆　現場の研究者の指標に関する意識としては、まだまだ反発もあるが、一方で、研究に関する説明責任を果たすためにも研究プロセスや成果の可視化が必要と考えている研究者も一定の数出てきているように感じている。

◆　結局は多様性と標準化のバランスが非常に重要。新たな分野に挑戦する研究者や総合知にかかわっていくとなると、分野の伝統的な書籍とか論文も大事だが、社会への貢献などについても評価されるようにすることが大事ではないか。

参考資料

指標に関する論点

令和4年1月28日　人文学・社会科学特別委員会
事務局説明資料より抜粋

1．論点の背景

「人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて（審議まとめ）」（平成30年12月　科学技術・学術審議会 学術分科会 人文学・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループ）【抜粋】

- 自然科学と同様に論文数や被引用度などの研究指標が採用されているが、人文学・社会科学においては**書籍の刊行もまた重要な成果の発表手段**となっている実態がある。
- 学術論文については、テーマ自体がそれぞれの**国や社会のコンテクストに左右される**こともあり、論文が採択されること自体の意味がそれらの違いによって異なる場合もある。
- 研究成果の公表の在り方や評価基準等を標準化するのが難しい**人文学・社会科学と自然科学の間では、状況が同一でない側面は考慮されるべき**である。
- 論文のテーマや枠組みが特定の国や社会のコンテクストと独立ではないがゆえに、**国際的な発信を行う際には、国内に向けた発信とは異なる配慮が求められる。そこに、国際ジャーナルに刊行された論文が直ちに国内的に評価されるわけではない構造が存在**する。（中略）国際的な発信への評価が適正になされるような学術環境の整備が強く求められる。
- 学術全般についても当てはまることではあるが、特に**人文学・社会科学に対する支援を確固たるものにするためにも、国民一人一人に対して積極的に、人文学・社会科学が自ら経済的価値も含め「役に立つ」ということの発信を継続することが重要**である。

2．人文学・社会科学特別委員会で検討する論点（案）

上記、審議のまとめの趣旨にかんがみ、論点として以下のような方向性が考えられるのではないか。

① どのような活用目的を前提に、人文学・社会科学に関連するモニタリング指標を設定するべきか

② 人文学・社会科学の特性に応じた多角的なモニタリング指標をどのように設定するべきか

③ 人文学・社会科学に関連するモニタリング指標の国際的通用性をどのように図るべきか

ヒアリングの概要

○1月28日

① 政策研究大学院大学　林　隆之　教授　「人文・社会科学における研究評価の課題」

・研究成果測定における多様性と標準化の問題
・海外における方法（ノルウェーモデル、ピアレビューにおける指標の標準化）
・日本の試行的分析（ノルウェーモデルの日本での実現可能性を分析）
・社会インパクト評価の課題

② 科学技術・学術政策研究所　赤池伸一　上席フェロー、　岡村麻子　主任研究官
「人文・社会科学研究に関連する調査～研究成果の多様性の可視化及び科学技術と社会の指標化を中心に」
・人文・社会科学研究の状況概観（科学技術指標や関連分析より）
・研究活動・成果の多様性の可視化（英国UKRIの事例）
・科学技術と社会の指標（責任ある科学技術イノベーション（RRI）の指標化事例）

○3月28日

③ 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館　後藤　真　准教授（人文学・社会科学特別委員会専門委員）「人社系研究力評価のための状況把握の可能性」

・人間文化研究機構のIRデータを材料に人文系研究力評価データの特性を提示（Book Chapterの把握の重要性、SCOPUSによる論文や書籍等の捕捉率など）
・現在の第三者データ（CiniiやJST等）利用の検討や、将来に向けた研究データプラットフォーム構築の必要性

④ 筑波大学　加藤和彦　理事・副学長（人文学・社会科学特別委員会臨時委員）
「研究評価指標と研究成果公開－筑波大学の試み－」

・新たな研究評価指標iMD（index for Measuring Diversity）
・研究成果の出版を迅速かつオープンに制約なしで行う「筑波大学ゲートウェイ」（F1000 Researchモデル）

※今後も引き続きヒアリング等を実施